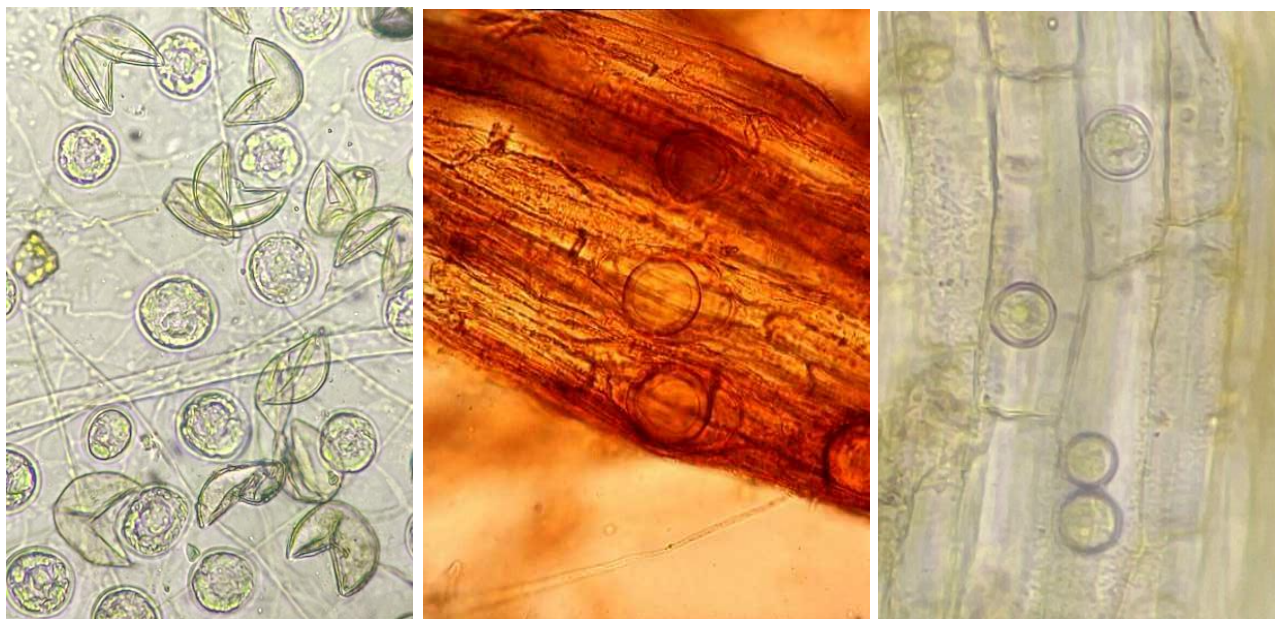


## 病原菌と間違えやすいスギ花粉

顕微鏡で見られる病原菌と紛らわしいものにスギ花粉があります。

「セロハンテープを利用した簡易なプレパラート観察法」(防除室だより Vol.9 参照)を用いて病斑上の孢子の観察を試みていると、春先3月～4月にかけて、スギ花粉がよく採れてきます。これは病理の専門家でも、知らないと判断に困る場合がありますので、画像を示しておきます。



スギ花粉(左)、イチゴ根腐病の卵孢子(中)、キュウリ根腐病の卵孢子(右)を並べてみました。いずれも球体の直径がおよそ 20～30 $\mu$ m であり、花粉には葉緑体が無いため、「スギ花粉」と「卵菌類の卵孢子」は見た目も大きさもほとんど同じです。通常、腐敗根の組織内に見られる卵孢子と同じようなものが、葉上にたくさん見えて戸惑ってしまいます。一つの判断ポイントはパックマンのように裂開したスギ花粉の外殻です。この構造は卵孢子にはありません。



スギ花粉の形態として一般的な認識は球体の頂端に小突起が出ているもの(左図右上)と思われます。これが水分を含むと外殻が裂開して、膨張した内膜に包まれた球体が現れます(左図左方)。その後、乾燥にともない内膜は消失し、卵孢子様の球体が残ります。

さらに困ったことに、裂開したスギ花粉は植物体の枯れた部分に多く見られる傾向があります。疎水性が失われており、花粉が付着しやすいためと思われます。そのため、枯死の原因菌と間違えやすいので注意してください。